

伝統の危機『騙されたと思って…』

第26期 青木 誠

我々、26期生は都立高校の入試制度が大きく変化した、最初の年に入学しました。当時は大学や高校も受験戦争が加熱ぎみで、その解決策に学校の格差を小さくする目的で学校群制度が導入されました。当時、千歳は松原、明正、千歳丘高校の四校で第二学区の25群というひとつのグループになり、我々は願書に25群とだけ記入し、四分の一の確率で本校に入学できたのです。

千歳ラグビー部の伝統は一貫して、三年生が秋の全国大会に出場し、やがてOBとなり後輩の指導にあたるという約束で支えられてきました。ところが、三年生が春の関東大会後に受験の為に退部し、二年生と一年生で部活を維持する事になりました。一年生である我々はルールの勉強や、プレーの基礎も程々に試合をする事になりました。一年生はフォワードに青木、岡、加藤、川島、佐藤、バックスに市川、大島、小川、小尾、谷田部の10名でした。それに二年生が7名でやりくりしてなんとか試合ができる様でした。

次の年も申し合わせたように25期は桑原らを残し全員退部し、前年と同じ様に一年生と二年生中心のチームで戦わなければなりません。三年生になったらクラブをやめる、という空気が次第に広がる中、OB諸氏の危機感が裏目に出て26期も新人戦を終えて新学期を迎える前に青木、岡、加藤以外は部活に出て来なくなり、重い空気が漂っていました。

しかし、元気も良く結束力のある27期や、新一年生である28期の小粒だが個性的な新人によって助けられ、再度クラブを建て直すべくOBの援助や指導から一時離れて活動する事になりました。この年は宇都宮での夏合宿も中止となり本校において、自主的に午前、午後と合宿しながらの練習を積みました。やがて再びOBとの関係も修復され、部員達がクラブを続けられるようにと家族の理解を得る為に「ラグビー祭」なる親睦会も創設されました。こうした話し合いの中であるOBの方から「騙されたと思って(ラグビーを)続けてごらん、きっとよかったと思える日が来るから」と説得されたのを忘れません。ひとつひとつの試合の内容はあまり思い出せませんが、現在に至ってみればその事が本当であったと思わざるを得ません。公立の普通科に通う高校生にとって受験勉強とラグビーを両立させることは大きな問題でした。たとえひとりになっても全国大会まで続けようと決意できたのは、先のOBの言葉と桑原さんの存在のおかげです。三年生が私ひとりという時期もありましたが、なんとしても、27期の情熱の灯は消すまいとやってこれた事だけが私の誇りです。卒業後の春休みに一旦中止になっていたOBを混えての合宿が千葉の新検見川で再開されました。豊富なメニューを消化し実力もついた27期はほぼ全員が三年生として全国大会まで戦ってくれました。

伝統を守ることの大切さは理解できても、高校生の分別には限界があります。しかし、ラグビーというスポーツの奥深い精神は今も千歳ラガーマンの心の中に生き続けていると信じています。

[春の関東大会予選]

岡博久

当時、部の混乱の為かどうか出場手続き漏れで、不参加になる処をもぐり込みで、平日に本校庭にて公式戦を行う。

事実上の26期最後の全員出場試合となり、対戦相手は末戦の「和光学園」であった。試合前のグラウンド整備やライン引きも公式戦なので入念に行う。試合は怪我人もなくベストで臨み、前半は級友の応援を得てミスもなく(11-0)でハーフタイムとなる。“これで頂き”と油断が落とし穴となり、“あれよあれよ”と逆転され、敗戦ムード漂う。しかし、踏ん張り所と、試合終了間際に、自陣25m内よりウイング市川までボールが回り、再逆転の快走トライ寸前まで持ち込むもフォローなく、ゴール前つかまりノーサイドとなる。“ああ無情”…

ここ一番の甘い26期でありました。当日メンバーは

- 1.巻田(1年) 2.林(2年) 3.草野(2年) 4.白石(2年)
- 5.吉川(2年) 6.高田(2年) 7.青木(3年) 8.加藤(3年)
- 9.曾根(2年) 10.小西(2年) 11.花沢(1年) 12.山崎(2年)
- 13.門伝(2年) 14.加藤(2年) 15.岡(3年)